ものいはずなげしひとみのうるほひにオリーブ色のかなしみの見ゆ
はかなくもけおされかちのわが名見ゆ憎しみかけんすべもあらなく
美しき人のこゝろにわがなげし憎しみに似て紫はよし
水色は大空のいろはてもなしかぎりもしらずめでたまへかし
美しきかたきといふもまだ足らす足らねどされど憎しみなげん
かなしとて泣けば魔の見ゆほゝえみてたゞさりげなくたそがれをまつ
じつとして泣けば何なる泣かざれば日の長きゆゑせんすべもなし

□

人もゆかぬ森の古池藻にあをみあやめの少し咲きてありけり
あはれこの心もとなさいかにせん夕べの池をめくりめくれど
池の面にゆらぐ光をつくゞと眺めてあればさひしかりけり
池にきてみればかなしく死の前にをのゝく如くうつる樹のかげ

L.

T.

はひよりてふとみしかゞみ怖ろしみまづなき出でし君なりしかな
うつれるはこのわれなりとたれ人に教へられしぞかゝみ持つ子よ
いたつきに惱めるかほを今日もまたさびしくうつすこのかゞみかな
死(し)にといふかげはちかよる弱き子の胸おどろかしかげはちかよる
さとのぼる日のかげ見れば生きてあることもうれしきひとつなりけり
つきまとふ黒きかげいとひしばしだに離れてあれと願へる心
物かげの菌にも似て世の中の暗きに生くる我か身なにせむ
行く末も小ぐらきかげにまとはれむ・この身としれどなほ生きんとす
春の國かすみの中の朝の鐘さやかになりて夜は明けにけり
山かげの野澤の水のうすけふり霞となりて夜はあけにけり
春の宵ほのかにかすむ月光の中を靜かに花のこぼるゝ
朝かすみやゝにうすれてさ青なる木々はしづかに光り初めけり
はてもなきむさしのゝ原かすみたちひばりなくなり日はながくして

盲人の三味流しゆく春の宵めしひし如きもの思ひする

はるがすみたてるを見てもたのしまで物おもひせしわれなりしかな

天地のよろこび見せて春がすみたなびく頃となりにけるかな

別れにし人を戀しき白百合はありし日に似てけふもにほへり

我が胸のいたて洗はむ水のこと白百合の香をゆるく流るゝ

むら〳〵とむらかる雲の色をみて物はかなさを思ふわれかな

昨日よりけふはまさりて菊の花うつろふ見れば寂しかりけり

夜をこめて雪や降るらんあめつちはあやしきまでに靜かなるかな

寒行の法師の鈴も遠ざかり靜けき雪の夜ぞ更けぬる

われひとりこの天地にあるかとも思ほゆるまでさびしき雪の夜

くるほしき己か心の如くにも眞闇の空にみだれ來る雪

武藏野のはてに雲湧き冬の日のくれぬとみれば淡雪の降る

おとろきよこよひも汝の手にありてのがれかたかる悲しみをする

いのり得ず今日もすぎけりさりながら悲しき母の名をよびてけり

ほろ〳〵と涙おつるに夢さめぬ母逝きませし朝なりしかな

母まさで一年すぎぬゆきしろきかのあさあけの我に來しより

ましまさぬ悲しき母の愛ほりて夕々の星になくなり

悲しくもかへりみすれば母の身になべてをかへてもの學びけり